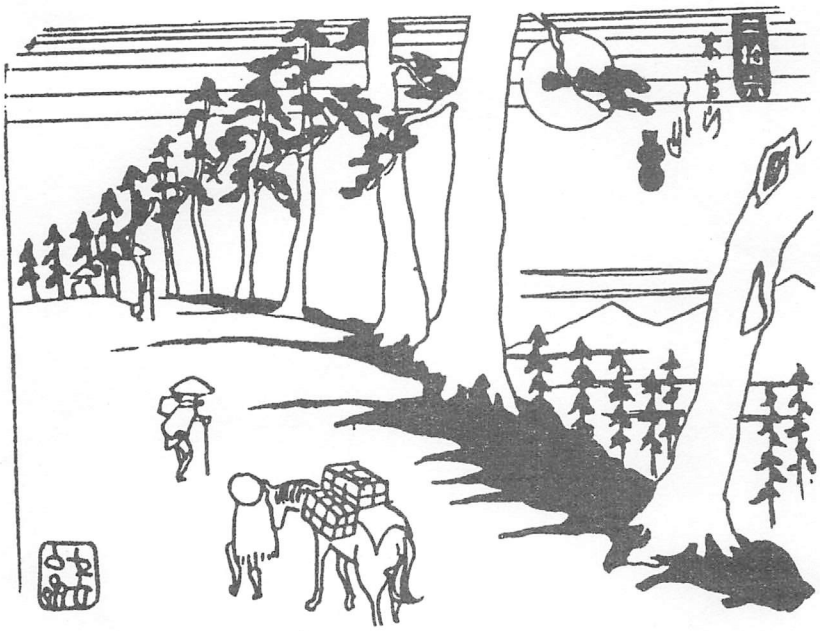
むかしっこ

（郷 土 誌）

第１号　昭和57年３月



南郷村中央公民館

郷土の昔を語る会

はじめに

郷土の昔を語る会は昭和５４年６月に発足して以来、南郷村の郷土史について語り楽しんでまいりました。今までに語り合った伝説等を記録として残したいと思い、この「むかしっこ」の発刊となったわけですが、何しろ年に３～４回しか会を開催しておりませんので内容に乏しい「むかしっこ」になりました。でも郷土史に関心をお持ちの方に多少なりともお役に立つことができれば誠に幸いと存じます。

これからも、「むかしっこ」の第２号、第３号を発行するために会を続けて行く所存でございますので郷土史に関心をお持ちの方はどうぞご入会下さるようお願い致します。

南郷村中央公民館々長　岩　織　文　弥

郷土の昔を語る会々長　堰　端　栄　吉

もくじ

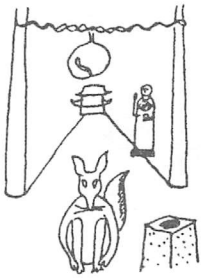
歴代村長名簿 …… 3
島守四十八神社 …… 4
伝説
十和田湖の伝説 …… 6
荒谷の狐 …… 8
八幡のおトラッコ …… 12
八郎太郎 …… 13
大蛇 …… 13
義経伝説 …… 14
トラ …… 16
屁たれ名人 …… 18
島守の伝説 …… 19
十干十二支の音訓と組み合わせ表 …… 25
島守のことば …… 26

歴代村長名簿

村名	氏名	就任年月日	退職年月日
島守村	佐々木　矩規	明 22. 4	明 25. 1
〃	久保　操	〃 25. 2	〃 33. 5
〃	中村　廣哉	〃 33. 5	〃 37. 5
〃	大橋　定太郎	〃 37. 5	〃 40. 8
〃	池田　元治	〃 40. 8	〃 44. 7
〃	久保　忠勝	〃 44. 7	大 3. 12
〃	〃	大 3. 12	〃 6. 3
〃	酒井　治雄	〃 6. 4	〃 10. 3
〃	太田　康衛	〃 10. 4	〃 12. 4
〃	坂　孫吉	〃 12. 4	昭 17. 12
〃	簗瀬　綱蔵	昭 18. 5	〃 21. 3
〃	池田　元治	〃 21. 4	〃 26. 4
〃	川畑　太三郎	〃 26. 4	〃 30. 3
〃	伊藤　一男	〃 30. 4	〃 32. 3. 30
中沢村	津村　明正	明 22. 7	大 6. 12
〃	畑山　福蔵	大 6. 12	〃 14. 12
〃	稲垣　邦	〃 14. 12	昭 4. 12
〃	市沢　安恵	〃 5. 1	〃 14. 9
〃	古舘　万之助	昭 15. 5	〃 16. 7
〃	津村　正文	〃 17. 1	〃 20. 12
〃	市沢　安恵	〃 20. 12	〃 21. 2
〃	石屋　健一	〃 22. 4	〃 26. 4
〃	市沢　安恵	〃 26. 4	〃 32. 3
南郷村	伊藤　一男	〃 32. 4	〃 35. 2. 2
〃	市沢　安恵	〃 35. 3	〃 37. 4
〃	石屋　健一	〃 37. 6	〃 41. 6
〃	砂倉　清紀	〃 41. 6	〃 45. 5
〃	壬生　末吉	〃 45. 6	〃 53. 6
〃	古舘　正志	〃 53. 6	〃

島守四十八神社

番号	社名	場所	摘要
1	新山権現	春日良治	権現様をまつる
2	天満様	字林（春日寿男の畑）	学問の神様
3	白馬祖神社	字竹野（中村末吉）	毎年祭典している
4	七ノ神	八幡宮	えぼしを七ツ埋めてある
5	水神様	字水口	
6	大日如来	上荒谷	耳の神様
7	スイテン宮	〃	
8	春日大明神		いくさの神
9	天満宮	字大そうり	
10	薬師如来	春日万一郎	目の神様
11	龍興山神社		豊玉彦命鐘棟札
12	秋葉山大権現	虚空蔵山	火事の場合現場に白い鳥が現れる
13	雨龍様	虚空蔵渕	雨の神様
14	福一満虚空蔵菩薩		二代南部直政
15	八坂神社	字舘	熱病（腸チフス）
16	住吉大明神	字舘	住居をよくする
17	ビシャ門天	字田中	七福神
18	山ノ神	字山ノ神	
19	稲荷大明神	虚空蔵山	福岡の稲荷より移したもの ドンコ稲荷
20	観世音菩薩	高山	４００年位前
21	コンセイ様	高山	坂ノ上タムロ磨呂岩手県脇堀より移転
22	アタゴ大権現	江花沢	
23	大日如来	平脇義雄	耳の悪い人が尊敬する
24	山ノ神	下江花沢	
25	八幡大菩薩	中里岩治	阿部貞とうの時代
26	新山権現	長瀬	山武士
27	熊野権現	〃	和歌山県熊野神社の別れ
28	鴨野明神	松倉東氏りんご園	島守小学校の下に移った



番号	社名	場所	摘要
29	春日大明神	坂本	平重盛時代
30	白ヒゲ明神	日ノ戸瀬教員住宅前	
31	ヨロイの明神	字小平	
32	住吉明神	字砂竜（行屋）	
33	山ノ木林馬頭観世音	字小平	
34	金比羅様	角金清蔵	
35	稲荷様	日山義雄	
36	秋葉山神社	字十文字	
37	金比羅様	旦平孫之丞	
38	秋葉山	高嶽	
39	虚空蔵山	砂倉良雄	
40	山ノ神	沢代	
41	熊野神社	字巻	
42	八坂神社	法霊崎絞吉	
43	権現様	滝沢久之進	
44	御蒼前様	字畑内	
45	天満宮	字狀舘	
46	オボシナ様	字古里	
47	妻の神	字相畑	
48	〃	字田山	

「十和田湖の伝説」

八戸町　橋本雲愛龍

新八景の一として世に知られた十和田湖には昔から主が住むといわれくしき物語が伝えられている。

その主は南祖坊（南宗坊）といわれ今も湖畔に霊験あらたかなる十和田神社があり十和田湖発見者として南祖坊が祀られている。

住者千余年前の頃とか奥州の北周辺は連山に包まれた寒村島守村があって山間より一条の川滔々と村に屹立する虚空蔵山（１千余年前皇孫小松内大臣虚空蔵菩薩像を寄進せられしというが現存す）の絶崖の下を流れ眺望の佳なる所その村に八太郎（八元太郎）という者が住んでいて、毎日魚を釣ってその日その日を暮らしていたが或る日の事、岩石の下をこんこんと流れる川の辺に出て岩魚三尾を釣ってわが家にかえり夕の食膳に供せんと親の農事の帰宅を待った。

この生々しい岩魚を見てはどうしても待っている事は出来ない。遂に一尾を食べ二尾を残して置くことにしたが、その美味を知った八の太郎俄に何事も打ち忘れ三尾共食べて仕舞った。そして咽喉が非常に乾き初めたので川の水を飲んだ所が見る見るうちにまるで化身の如く変り少量の水では到底飲み足らず、そこで山と山との間をせき止めて湖を造りその主になろうとしたのである。

然るに今造られては、村はことごとくその水底となって仕舞う。それは実に由々しき、大事である。というので虚空蔵菩薩は大いに怒り神威を示しくれんと付近の観音菩薩をはじめ諸神を集め遂に八の太郎をこの平和な村から追い払って仕舞った。八の太郎は行く所なく海岸近く人里離れたさびしい小沼（八太郎沼といふ）を見出し真っただ中におどり込んでなおも水を飲み続けた。

元より小さい沼のことだから数日ならずして水は盡き絶えて住家には適しなかった。そこでもって大きい沼はないかと大仏村から七崎村の間（跳崎という所あり）を一足飛に鷹巣村を過ぎ草鞋の瘤（瘤森という森あり）を落して谷を越え川を渡り奥深くもわけ入り湖のほとりにたどり着いて見れば漫々たる水のたたえた幾十尋とも知れぬ深み月明に照されて白銀の鐘の様な美しい湖面ここならば自分

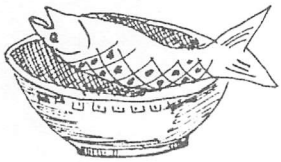
の住み家として永久に然(し)かもいくら湖水を飲んでもつきぬとよろこんで主となった。

湖畔にはまれに見るきれいな娘が住んでいた。何時しかかの女を恋人として楽しき夢も束(つか)の間、その頃斗賀村に霊現堂があった（別名涼現堂・中納言藤原有家郷配流に処(しょ)せられたこの土地に創建(そうけん)せられし伝えらる後世南北朝時代の忠臣八戸政光公後村上院の被護を託せられ長慶院奥州御下向遊ばされその皇子大信明尊正平二十一年三月三日鰐口(わにぐち)を寄進せられしという由諸ある所）その堂の主有家郷の男でこの地に生れた智僧があった親が末たのもしく思って宝照山普賢院（僧行海大師諸国の霊地を尋ねて巡遊する内七崎村に霊地を求め創建せられ境内に垂跡を存せんがため七星をかたどり杉七本を奉納(ほうのう)され内三本現在有り大なるもの幹の太さ三丈五尺余、又承元年間北條最明寺時頼国廻覧の時、ここに宿り故郷の空を眺め月の出づるを見て「永福寺へと来て見れば兎月おし移る月の清けさ」とよまれたればその頃はすでに永福寺と改称されしならん）の僧行海の弟子となし参籠し戒法を受け郷に帰り月体大和尚につき霊現堂の裏山（霊現堂の裏山に参行という所あり）に難行苦行の修業を重ねること三カ年にしてなおも行を積まんとこの地をわらじをはいて霊峰をたどられた人呼んで智僧南祖坊というはこの人であった。八甲田山麗の十和田湖畔に差しかかった時金のわらじの緒が切れた。長い道中にくたびれた南祖坊想わず「ここは吾が住む所だ」と叫んだ。

その時不思議や美しい女が現れ出て「妾(わらわ)御そばに任せん」といった。突如一天かき曇り颯々(さつさつ)と風を切て湖面に大波が立ち騒いで八の太郎は身の丈十数丈に余る化身となって両眼を日月の如く輝かせ焔の様な口を開いて現われた。そして物凄(すさまし)く「おれは十和田の主である。僧の身にありながら吾が恋人を奪い取り、それにこの湖の主とならうなどとは怪(あや)しからん事だ。おれは十和田の主として絶対に入る事は許さぬ。お前の命を取ってやる」と詰め寄ったので南祖坊は肌身離さず隠(かく)しいたる護身(ごしん)の剣を電光石火の如(ごと)く振り法力を以(も)ってこれに応戦しここに物すごい闘争がはじまった。

かくて数日数夜にわたったが八の太郎もひるまず戦い湖水は血くれないに染まって八の太郎は遂に力盡(つ)き正体を現し全身くわんの浅ましい姿となって断崖には

い上りその岩も血に染まったその時南祖坊珠数を手に取るが早いかじゅ文を唱へたるに八の太郎は息も絶え絶えにわが身を悲しみ天を怨んで敗走した。かくて八の太郎は八の太郎沼（八郎沼）の主となったが南祖坊は十和田湖の主となって永久の住家とされ雄大な絶景に包まれた十和田湖畔にまつられた社はそれである。



今度、新八景の一として選ばれたのも南祖坊の御加護によって全世界に誇るべき神秘的勝景が紹介されたのであろう。

荒　谷　の　狐

提供　角　金　万　次　郎　氏

むかし、荒谷のあるところに、「おと」と「あっぱ」と五才と三才の子供の四人家族があったず。

ところが、二十日（はつか）前に、末子が風邪がもとで死んだので、裏の墓所へ葬ったず。明日は、三七日（みなのか）なので、町へ行き、何か買ってきてあげたいと、「おと」と「あっぱ」は、相談して、明日の朝、八戸の町に行くことになったず。

一番鶏が鳴（な）いたので、「あっぱ」は飛び起きて、朝飯の仕度にとりかかり、やがて、「おと」も起きて、朝飯が終ったので町へ行く仕度をしたず。

「おと」は、叺（かます）十枚をしょって八戸へ向って、赤穂渡橋を渡り、頃巻沢を経て、十文字に出て、上り街道をどんどん進んだず。

おばあ懐（ふところ）まで来たら、四方が一寸明るくなってきた。

「とうとう明るくなったぞ。」と、つぶやき、向うを見ると、やせた狐が一匹居て、十円札をくわえていたず。

「おと」は、狐に近づいて、

「狐子あ、よい物持って居たなぁ。私さ、その札をよこせ。

町から魚っこ買って来てやるから。」

と、言うと、狐はにこにこしながら札を渡したず

「おと」は、札を取り、心の中で、

「よかったぞ、狐を斯(だ)ましたぞ。」

と、喜び、乍(にわかに)に、八戸へと急ぎ、八戸へ着いた時は、すっかり朝になり人々が忙し気に歩きまわっていたず。

「おと」は、叺(かます)を売って仏様にあげる線香やお菓子を買ったりして、帰りの道についたず。

街道をどんどん歩いていると腹がへったので、あたりは山々なので道ばたに座って、お昼のおにぎりを食べて腹がつやくなったず。

家へ向って歩いたず。

おばあ懐(ふところ)までくると、今朝の狐が、にこにこ笑って座っているではないか。

「おと」はびっくりして、

「狐子あ、町に魚(さかな)っこなくてさ、どうにもならなかったからなあ、悪く思わないで下され。」と言って、どんどん歩いて狐の居た所を去ったず。

一方、狐は、

「おとの野郎にだまされて、今日一日此処に待っていたんだ。狐が人間にだまされるなんて馬鹿だなあ。よし、我にだって考えがある。」とつぶやき、乍(にわかに)、山へ走って行ったず。

「おと」が家に帰った時は、日はすっぽり暮れて、「あっぱ」は夕飯の仕度をしていたず。

「今、帰った。」と「おと」が言うと、「あっぱ」も、

「よく、早く帰ったなあ。」と言うと、子供は、

「早かった、早かった。」

と、「おと」の側に駆けよって喜んだず。

「あっぱ」も夕飯の仕事も終わり、家族三人がすぶとに薪をどんどん焚いて、四(よ)方山(もやま)話をしていると、外から、

「今晩は、ごめん下さい。」と、お客さんの声がした。

「あっぱ」が、「はい。」と言って、行って戸を開けると、立っているのはいつでもくる、かつぎ魚屋だった。

魚屋が申すには、

「今日はとてもよく売れたが、一番大きいこの鱈(たら)が売れないので今まで歩きまわっていたら、暗くなって、八戸へ帰れなくなったので、この鱈を家賃にするからなんとか御願いです。私の食べ物はいらない。あそこの家で餅を沢山いただいて食べたので。」

と言うと、「おと」と「あっぱ」は二人で、こそこそ話していたが、

「いいさ、とまりなさい。」

と言うと、魚屋は先ず第一に大きな鱈を、

「これを今夜のうちに食べて下さい。」

と、出したず。

「おと」は、

「三つになる子が亡くなってから明日で三七日(みなのか)だから、子供のことだから今夜食べてもいいだろうなあ。あっぱ」と言うと、

「いかべあ、幼児のことなんだもの。」

と言うたず。

「おと」は料理にかかり、「あっぱ」は、いろりに鍋をかけて「おと」の切った鱈を煮たず。間もなく煮えたので、皆で食べたが魚屋は、

「おれは、何時でも食べているので、食べたくない。」

と言って食べないず。

家の者達は、「ああ、うまい、うまい。」と言って一切れも残さないで食べだず。

食事が終わったので、魚屋を客間に布団をしいて寝せたず。

そして、家の者も休んだず。

魚屋は布団の上で寝ながら、

「この家のおとは、われをだまして十円札をとったから、われも二十日前に死んだ子供を鱈(たら)にばかして、食わせてやったんだ。

それでも、おとが悪いのに家中の者をだまして悪いと思っているから許して下

　され。今夜はこれで帰る。」

と、心の中で言いながら、雨戸をそっとあけて前の山へ走って行ったず。

　やがて夜が明けたので、親子三人は、墓場へ行って驚いたず。

それは、二十一日前に土の中に葬った子供の体が無くなって、死体を入れた箱は、めちゃくちゃにこわされて、そこらに散らばって、土には新しい穴がぽらんとあいていたず。

あらねもしないで、皆、家へ走って行き、

「どうも昨夜は、おかしかったよ。」

と話し合い、乍（にわかに）、炊事場へ入って見て驚くの驚かないのって話しにならない。

二十一日前に墓場へ葬った子供の頭、背骨、手、足などが、さいばんの上にあるのではないか。

「おと」は急いで客間に行って見ると、魚屋はいないで布団には狐の毛が沢山ついていたず。

「おと」はすぐ炊事場へ行き、

「この頭などは、死んだ花実のものだ。夕べの魚屋は人間ではなく、狐のおばけだった。」

と、言って、「あっぱ」と子供に、昨日、狐をだまして泣かせたことを話して聞かせながら、花実の頭、手、足などを箱に入れて墓地に持って行き、みんなで、ねんごろに葬ってやったず。

　家へ帰り、すぶとにあたり、乍、狐を泣かせたので、その仇をうたれた。

「おとのお陰でお前らにもいやなことをさせた。」

と、「あっぱ」や子供に謝り、そして、

「お前達にお願いがある。それは、人は勿論、生き物は、何んでもだましてはならない。だませば、だまされるからなあ。」

と、言うと、「あっぱ」も、

「ウソはつかない。人の物は盗まない、と約束をすよう。」

と、言って、三人は手を取り合って確く、確く、約束をしたず、

三人は顔を見合っていると、向いの山から、

「足二本の荒谷の狐、自分の子の肉を食べてうまかったべ、じゃがあ、じゃがあっ」、と、さかんで飛ぶように走って上り街頭の方向へ消えて行ったず。

其の後、狐をだました「おと」の家の人は皆、他人をたくぱる（いつわる）ような事は絶対にしないで、真面目に働いたので、かまどはどんどんよくなり、長者様になったず。

これで、どっとはらい。

「八幡のおトラッコ」

提供　古　舘　サ　ダ氏

昔、島守の中里に「八幡」という家号の家があったそうです。

八幡では、年とった「トラ猫」を飼っていた。

その家では、毎晩、豆絞りの手ぬぐいがしっとりとぬれているので、なぜそうなのかと思っていたそうです。

ある日、家中の者が親戚の御祝いに呼ばれて、嫁さんだけが留守番をしていた。

夕飯を食べた後、嫁さんは、炉にあたって麻糸を作っていました。そうしている内に、「トラ」が炉にあたっている嫁さんに、

「嫁さん、オラが踊りを踊って見せるか？」と言いました。嫁さんは、

「お前には踊れないだろう？」と聞くと、

「誰にも言うなよ。」と、トラは答えた。

仲間は、小平の「コン子」、　立野坂の「ターツ子」、ほうりあ久保の「ホーツ子」など、その他大勢集まり、おれが音頭をとって、

「八幡林で八幡のおドラ子、来なければ、踊りこしまらん、しまらん、と毎晩、夜の白らむまで踊っている。」と言いながら、後足で立って踊りだしたそうです。嫁さんはビックリして開いた口がふさがらなかった。あまりの事に嫁さんは、口留めされているのも忘れて、ある晩家族みんなで夕飯を食べ炉にあたりながら世間話をしている時に、嫁さんは突然、「オラ家のトラが……」と言うか言わないうちに向こう側で眠っている振りをしていた「トラ」が、いきなり、炉の上の火を飛び越えて、嫁さんの喉笛に食いついて嫁さんを殺ろし何も言わせなかった。

八幡の杉林は、「高畑繁昭氏」の物置小屋の北方の少し後ろだそうです。

大　蛇

島守尋常高等小学校六年　岡　前　晴　夫

昔、門前にお寺があって、その前に新井田川が流れて居りました。その新井田川に『川畑ふぢ』という深いところがありました。ある時、その川に大水が出ました。するとその川畑ふぢが海のように広くなり、深くなっておそろしい程になった。そこに一匹の大蛇がいました。大水が出たので大蛇は、のこのこと川岸の方へのぼって来ました。そして川畑ふぢの近くに一軒の家がありました。大蛇はその家のねだにかくれました。

幾日かたって、電光雷鳴がはげしくなった。するとその一軒の家に雷が落ちた。するとその一軒の家に雷が落ちた。その家は忽ち(たちま)燃え上り、火事になりました。大蛇はにげれなくなって、到々焼けて死んでしまひました。後、人々が行って見ると、大蛇の骨があったといふことです。

八　郎　太　郎

島守尋常高等小学校六年　澤　端　元　吉

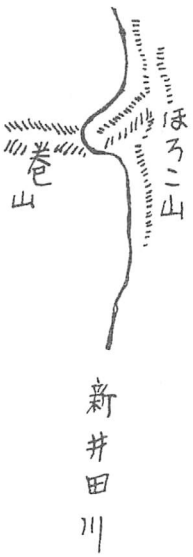
昔、相畑に生れたざへいの八郎太郎は、或日お父さんと炭焼きに、かいの小川のほとりに行きました。もう昼頃になったので、お父さんが「行って水をくんで来い。」と八郎太郎に行った。八郎太郎はすぐ、おけを手にさげて、泉に行きました。水をくもうとして見たら、三びきもじゃこが居ました。さっそくおけを横にし、手でおけの口にかちゃかちゃとにごりたてぬようにして、魚をおけにとって帰って、それを焼いてたべました。すると、とてもとてものどがかわいてもう立っても居ても出来なくなりました。そこで、おけの水をどんどんのみました。おけの水もなくなりましたので小川の水をごくごくのみました。おけの水もなくなりましたので小川の水をごくごくのみました。そのうちに小川の水もひいしまいました。水にうつった八郎太郎の顔は、まっかになっていました。こうして帰ればしかられると思ったので、そのままどこかへ逃げました。お父さんは、その晩村の人を呼んで探しましたがどこにも居ません。もう葬式をする仕度に親類の人々をよびました。

八郎太郎は小川をづんづん下りました。すると、広いやちのあるところに出ました。途中大きな川がありましたのでその川を上の方へどんどん上がりました。そうしているうちに顔も同じになったような気がしたので又川を伝って家へ帰った。

それから八郎太郎は非常な大力になって、前坂から大きな石をたもとに入れて来て、どそりとなげると、ぢひびきが地震のようにどきんどきんと上下にゆれた。

それから数日たって、又水をのみたくなったので、今度は又小川を下り、大川に出て上り、そうしてどこかをせき止めてのもうと考え、川の向うに上って、大おので土をどきりどきりとほった。今度は反対の川向いに上ってどきりどきりとほった。だから今の世増(よまさり)を、よまさがりからそういうのだそうです。その時のまさかりのえが、今の狄舘(えんだて)まどとどいたから、そんだてというのだそうです。

八郎太郎はまさかりで掘った土をどんと、もっこに入れて一(ひと)もっこづつくばった。そのくばったところが今の巻だそうです。三もっこまで巻山にくばりました。もう一(ひと)もっこほろこ山にくばれば島守は湖になってしまったことでしょう。



八郎太郎のするさまを見た島守四十八社の神たちは島守の村民を愛して八郎大郎を追出す考えをして、今の村上与吉氏の家の後にある島守という小さな森によって相談することにしました。ところが四十八社の中の一人の神様が「おらごどあなあに、なんぼ湖に水あ来ても、せに、こなあしかよう。」と言って相談するに↗↘来なかった。そこで四十七社の神様たちは、その神様を一つづつふむと肩が落ちました。

四十七社の神様たちは、八郎太郎をとうとう十和田湖に追ってしまいました。

肩を落した神様のお堂を慶応元年に建てたそうです。

義　経　伝　説

提供　角　金　万次郎

昔々、島守の門前の外舘に城があって、城主は島守殿であった。この外舘城へ種市（現在の岩手県九戸郡種市町）の殿様と称する者が、幾度となく攻めて来た。

攻めて来る時の道順は、種市から階上岳を越え、現在の田代川の釣堀のすぐ側の道を下って、妙川、田代、石仏を経て、相畑の上の七曲を下って不習に登り、不習と島守の間の昔の通路（上野坂へ出る道）を進むと、民俗資料館の裏山の朝日あたりにある、ちょう塚森（正しくは経塚森）の下へ出る。このちょう塚森こそ種市殿の本陣に使われ、そこからちょっとくだると、弓を射た所が二箇所ある。

両陣は、島守川（新井田川）をはさんで対峙し、種市勢は、日帰りで攻撃したり、時には二・三日駐屯して、弓を射ち合ったり、川岸まで進み戦ったが、なかなか勝負はつかなかった。

ある日のこと、種市勢が、例のちょう塚陣地へ着き、外舘城へ探りを入れると、武士らしい者は何処かへ出かけたらしく、城内はひっそりとしていたが、殿様は確かに城の中に居た。

種市勢は、殿様と二・三名の武士が馬に乗って先頭にたち、総勢が山を駆けおりて川を渡り城内に攻め入ると、島守殿は勇敢にも切りかかってきたが、多勢に無勢、ついて首を取られてしまった。

種市殿は部下達に、「老人、女子供には手をだすな、さっさと引きあげよ。」と、声高々に命令して自分が先頭になり引き返していった。途中、一同が喜び合いながら食事を済ませ、間もなく種市への帰途についた。

石仏まで進んだ頃、日はすっぽりと暮れ、あたりは暗くなった。「暗くなった、さあ、歩け歩け。」と、励まし合いながら歩いていると、暗い木陰から、十人もあったろうか、待ち伏せしていた武士達が種市殿に切りかかり、あっと言う間もなく殿様は馬からころげ落ちた。皆で駆けよると、もう虫の息で、間もなく息を引き取ってしまった。

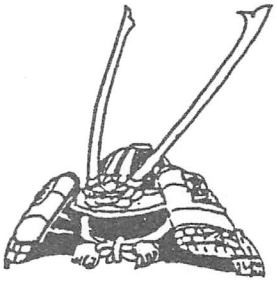
待ち伏せして居た武士は、島守殿の家来達だった。城外に出ている間に、自分達の城は荒され、殿様は血みどろで冷たくなっており、ひとっこ一人いない城へ帰って驚き、皆でこれからの事を決めました。種市勢を追う者、城内をかたづける者、見えなくなった婦女・子供・老人を探す者を決め、種市勢を追う者には腕の勝れた人が頼まれ、近道を駆け進み、現在の石仏で待ち伏せして居たとのことである。

種市の殿様とは、実は源義経であったと言われている。歴史上では、義経は衣川の川原で切腹し、その首を、藤原泰衡が黒うるしのひつに納め、美酒に浸して

鎌倉の頼朝の元へ送ったということだが炎暑のため真偽はわからず、その首は義経のものではなく、身代りの杉目良太郎行信の首だったとの説もある。

義経は、何人かの家来達と衣川を舟で下って海へ出て、種市の海岸へ上陸して居て、島守の殿様を攻め落したが、自分も帰る途中はかなくも殺され、家来達が山中へ葬ったとのことである。

この墓と言われる所に、現在も大きく美しい自然石がぴかぴか光って立っていて、石仏という地名も、この石の由来から生まれたものと言い伝えられている。



以上で、義経伝説の終りだろうと思っていたら、義経はその後、八戸へ出て津軽半島のみんまやへ行き、そこから北海道へ渡り、大陸へ行ったとの伝説がある。

一一方、外舘城の残存者達は、上北郡七戸町まで逃げ、同町の川向にその遠き子孫が生存しているとかの話を耳にしたこともある。

また、八戸市の麦沢へも逃げのび、現在、島守姓の方々が在住しているということであるが、この元々の遠い祖先は、義経時代から何百年か後の、別な島守の殿様が、八戸の根城の殿様に敗れた際の残存者だとの説を耳にしたことがある。

以上のことは、自分が幼少の頃、祖父達から聞いて喜んだ昔っこである。

それでは、これでどっとはらい。

「トラ」

提供　角　金　万次郎

むがすむがす、大むがす、小山田の馬場橋の近くに、貧之な寺があったず。その寺には年とったお尚様と、大きなとら猫とが暮らしていだず。

ある時、その寺の壇家の金持の若旦那が死んだず。お尚様は、近所の人から金持の若旦那が死んだことと、葬式の日取りを聞いて衣や足袋を洗って、葬式に頼むに来るのを待っていだず。二日たっても頼むに来ないず。三日めになって、いよいよ葬式の日の朝になっても、何のおどっこもないず。

お尚様は、「おらぁ、貧之で良い衣っこも持たないので頼まないんだろう。おらぁほうの壇家でありながら」と、ひとりごとを言ったず。「今日の旦那の葬式には、よその村や町のお尚様が十人もくるそうだ。うちは頼まないそうだ」と言うと、お尚様は今にも泣き出しそうな顔になったず。その様子をそばで見ていた猫のトラは、「お尚様、がっかりするなよ、おらぁ、いいことを知っているからなぁ。葬式が橋のたもと迄来たら、わ、空から棺をまきあげる。すると、よそから来たお尚様達は驚いて、お経をあげるだろう。おらぁ、益々天高くまき上げる。どうにもならなくなると、誰かが『うちのお尚様を頼んでみては』と言うと早速頼みに来るだろう、そうしたらお尚様は棺の下に行って、〃なむトラやぁやぁ。なむトラやぁやぁ。なむトラやぁやぁ〃と声高くおらを呼んで下され。次はお経をあげてくれっ。そうしたら棺を静かにおろすから。」と言ったず。

二人は葬式のくるのを待って居だず。そのうちにトラは何処かへ行ってしまったず。お尚様は衣を着て、すぶどにあたっていたず。午後になったら、葬式の音っこぁして長い列が来たず。

いよいよ棺が橋のたもとまで来たら、空が急に曇って稲妻が光り棺は空高くまいあがったず。棺の先に居たお尚様達は、みごとな衣装で、声高々とお経をあげたが、棺はおりないので皆んなで騒いだず。誰かが「うちの寺のお尚様を頼んでみてはどうかなぁ」と言ったず。すると「そうだ、そうだ」との声が沢山あったので、早速頼んで来たず。お尚様は、棺がぐるぐる廻っている下に来て、今朝トラが言ったとおり「なむトラやぁ、やぁ」を三回大きな声で唱え、お経をつづけてあげると、さぁ、どうした事だろう。棺は静かにさがって来たず。墓は、貧之寺にあるので葬式の列はすぐ寺につき、何もなかったように全部終ったず。

そのことがあってから壇家の人達は、貧之でも自分達の寺の「お尚様が一番えらい。」と言うようになったず。又、どこの寺のお尚様でも、お経の先に〃なむトラやぁやぁ。なむトラやぁ、やぁ。なむトラやぁ、やぁ〃と読むようになったず。

貧之寺のお尚様は、このことがあってから壇家の皆んなから、とっても大事にされだず。お尚様は「トラのおかげで、しあわせになった。」とトラをますます可愛がったず。これでどっとはらい。

※すぶど……すびどともいう。いろり。

屁たれ名人

提供　角金　万次郎　氏

昔、ある村に、五作と三助と家が隣り合わせの二人が仲よく暮らしていたず。いつの間にか年も明け、今日は元旦だ。

五作は、「我々貧之人には、いくらめでたい元旦でもよそのだんな達とは違って、先ず山へき、薪をたくさん取ってきて火をどんどん焚いて、まずくても腹いっぱい食べて、背中をあぶって寝ることがめでたいことだ。どうれ、山へ行って薪を取ってくんべなぁ。」と言って山へでかけたず。

山へ着いて枯木を見つけたので、鉈で〃がっきら、がっきら〃と切ったず。そこの山は、村一番の物持ちの山で、家もすぐ側だったので、そこのだんなが、「誰だ。人の木を切るのは。」と大声で叫んだず。五作は、「だんだるまあすの屁ったれだ。」と叫んだず。するとだんなは、「では、ここへ来て屁をたれて見ろ。」と言ったず。五作は「はあい。」と言って、どんどん駆けて、だんなのすぐ前まで行ったず。するとだんなは、「ここの縁側に上がって屁をたれてみろ。」と言うと、五作は早速縁側へ上がり〃あいにさらさらこがねにさらさらぴんぽんぱつん、ぽん〃と屁をたれたず。すると今度は「おれの肩に上がってたれろ。」と言ったず。肩に上がって〃あいにさらさら、こがなにさらさらぴんぽんぱつん。ぶん、ぽん〃とたれたず。もの好きなだんなは大変喜んで、おばあさんに酒のしたくをさせて、酒を振舞ったず。

五作は酔ったので「もう帰る。」と申すと。大きな餅やお金をたくさんくれたので喜んで我が家へ帰り、おばあさんに餅を食べさせ、その夜は楽しく休んだず。次の日の朝になり、五作老夫婦は、すぶとにどんどん火を焚いて、きのう貰ってきたお金を数えていると、隣りの三助が「ああ～ぁ寒い。寒い正月だなあ～、あててけろ。」と言っていろりの側へ来たので、五作は「よく来たな、あだれ。」と言うと、三助はあたりながら「こんなに白い餅どこからきた。われのほうには、黄いろい粟餅やごぼう葉の餅ばかりだ。」と聞いたず。五作は、きのうのことを残らず話して聞かせたず。すると三助は、「われも今日行って見る。」と言って家に帰

ったず。

家に帰った三助は、鉈を持って五作の行ったというだんなの前の山へ行って、〃がっきら、がっきら〃とできるだけ音が高くなるように木を切ったず。それを聞いただんなは「誰だ、人の山の木を切るのは。」と大声で叫ぶと、「だんだるまあすの屁ったれだぁ。」と叫んだず。だんなが「こっちへ来てたれてみろ。」と言ったので、しめしめと思いながら三助が走って行くと、だんなが「縁側に上がってたれろ。」と言うと、急いで縁側に上って〃あいにさらさらびんぼんばづん、ぶう〃とたれたず。すると「お前は五作よりちょっと下手だな。」とだんなが言ったず。三助は「だんだんよくなってくるから、だんな様があぐらをかいたひざに座らせてくだされ。」と言ったず。だんなは、なんだかあまり気の進まない顔つきで、「よい屁っこできるかなあ、ひざに座ってやってみろ。」と言うと、三助は早速だんなのひざに座って精一杯力むと〃あいにざらあ、じゃらぁ、ぶう〃と変な音がして、屁の元が出たず。だんなは、早く帰れと言って三助を両手で押し、にがい顔をして座敷に入って、障子をぴしんと閉めたず。

三助は泣きながら家に帰って行ったず。途中、五作の家に寄って今迄の事を残らず話すと、「よい屁を出すには、第一に食べ物を選ぶことさ、われのような貧之人でないと駄目さ、早く帰っておばあさんに洗濯させて。」と五作に言われ、三助はしょんぼりと帰って行ったず。

自分の考えもなく、人真似をすると失敗するず。これでどっとはらい。

島守の伝説

(1) 口碑伝説偉人傑士

(一) 口碑伝説に関する部

(イ) 本村は八戸を去る南方、約三里四囲、山にして村の稍々(やや)中央を新井田川(鷹巣川)流れて、山川の眺め宣しきを得頗(すこぶ)る幽遂(ゆうすい)にして、真に仙郷(せんきょう)の地なり。由来、交通至って不便なるより古(いにし)へ武人の落ち忍びし話も少なからず。本村を去

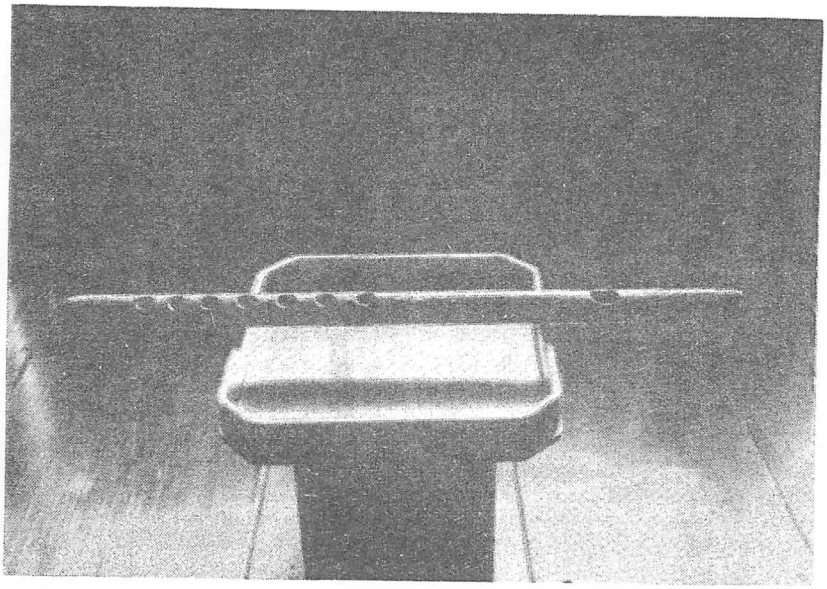
る一里余り上流の地に勝負沢という所あり。茲に去る頃、小松内大臣、平重盛公落ち来り。或る日、烏帽子を冠りし儘、畑を耕し居りし際、敵方にては紫雲の行衛を辿り所々深し居りしが計らずも公の烏帽子日光にかがやき、早くも敵方に見附かり公は烏帽子を脱ぎ急ぎ畑に埋めたり、依りて其の畑をば烏帽子畑と名づけ今尚、其の跡あり。年代不明なれども口碑のまま茲に述べたり。

(ロ) 勝負沢より川伝へに上ること半里余りの茲を畑内と云う

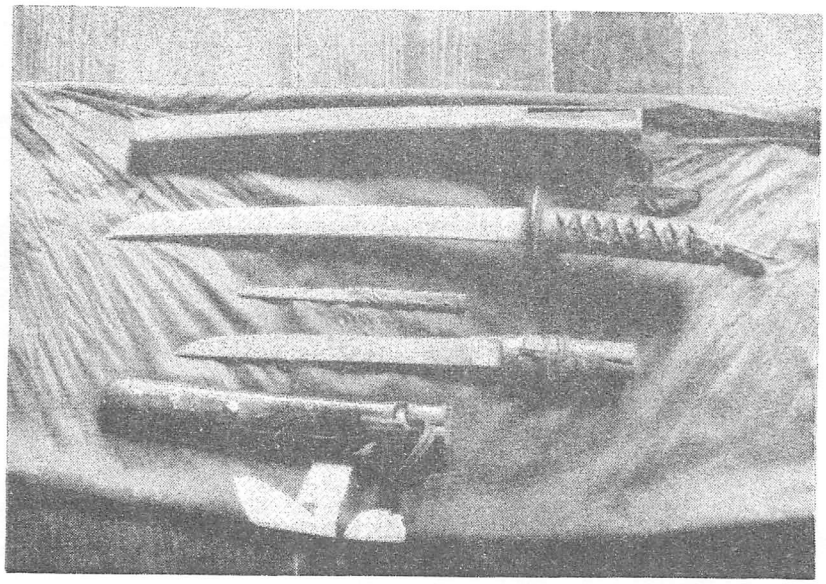
内と云う。公は負けて此の地に至えりとか。或る夜、旗を立て陣営を堅め居りしが如何なることか敵に見当らざるに一夜の中に旗を失へりとかいう（旗無い所より現今の畑内と改めしには非らずや）此の地は川にぞい巡らしに山累々然も落ち武者のかくるるには、天与の土地なり現今、戸数十四、五戸に過ぎず。此の地の住人大長根某の家は曽て勝負沢に住せしが今より何代先きのことか不明なれども此の地に永住の由、茲には伝説に過ぎざれども小松内大臣平重盛公落ちさせ給いしとき持ち来られし青葉の笛と称する物あり。黒漆塗りにして長さ一尺四寸五分（曲尺）至って粗末なれども古色古臭の中に言い得ぬ感を与へり。外に刀あり長さ七寸八分（曲尺）銘に曰く（修川長船守正）とあり至って粗刀に見われも千軍万馬を往来せる古武士の持せるものとすれば血痕なけれも往時の勇姿彷彿たり。由来此の刀を持って川ぞいに歩み居りし際、失いたることあり。村人を雇いて尋ねたるも更に見当らず。主人行きて見れば、第二発電所水門の附付道端にありしとか雇人は見れば只枯枝と計り思うて刀とは気附かず。主人だけに見ゆるよりして益々刀の只ならざるを怖れ累代の宝物として蔵し居れり。土器製茶椀の如きもの二個あり、直径四寸、高さ二寸四分、糸尻、直径一寸五分（曲尺）、如きもの一箇あり直径三寸五分、高さ一寸三分、糸尻直径二寸（曲尺）底くさりて穴あり。

金製盃の如きもの一箇あり直径二寸三分、高さ一寸二分、糸尻直径一寸二分（曲尺）盛鐘の如きもの一箇直径三寸高さ一寸八分（曲尺）底に穴ある。

以上、何れも古色を帯び見る間に言い得又、懐感にうたる。



青　葉　の　笛



刀（修川長船守正）

(ハ) 畑内村より川に隔てて、水吉村ある。本村分は戸数二戸坂下某の蔵せる旗に旒あり、一は絹地にて一は麻地なり。

昭和三年犬六月二十四日

奉納御国三十三正　順礼　　水吉村

宝暦十年辰六月十七日　　奥州南部八戸領　　絹地

奉納西国三十三正順礼　　右門三郎

昭和六年丑七月十六日

奉納秩父三十四　正順礼

昭和七年　　水吉村

奉納秋葉山三尺坊大権現　　奥州南部八戸領　　麻地

寅　正月十七日　　右門三郎

道を隔てて、岩手県なり矢張水吉村にして戸数八戸あり。

(ニ) 沢代村森沢某は旧家の由茲に古き槍、刀、薙刀等の蔵あり。又、巻村大倉某も旧家の由茲には古き大形の鐙及び槍の蔵ありて古物なり。思うに本村は地勢上往昔落武者の忍び場所としては無にの天其地なり、察するに何れも名ある古武士の遺品なりと思われる。

(ホ) 南部名産八戸煎餅の全国に名を知らる由来を尋ぬれば世増村にて煎きたるものなり。最初蕎麦粉を煎きしものより始まり後世に至って麦粉に替へ胡麻を附したるなり。年代及煎き始めの人は不明なるも惟ふに住昔落武者閉日に世を送りし際工夫せるものらし。後世に至り改良して種々のものあり。

(ヘ) 偉人傑士に関する部

本村は最近各方面に発展する有様なれば将来は有為の人物出づることと思う、古来よりの言い伝え少し(ヘ)の部に入るも、如何かと思わるれど本砂篭と称する太田亀吉氏先代の人は旧藩時代、既に非凡と見え松前（当時函館）に貿易をなし自宅にて味噌醤油を盛んに醸造して貿易せりとかの由、遺憾ながら年代及び名、不明、口碑のまま茲に記す。

(2) 古蹟古史古文書

(一) 古蹟に関する部

(イ) 世増を古へ四斧と名づけしとか此の地に舘あり。往昔左郷雅楽佐住せりと伝う。此の人郷にて禁じ居られし肉食卵用せしにより地頭（滝沢某）より追われ禰宣堂（法霊崎某）に預けられたり茲にても改心せずして古里と称する所に追われ此の地に於て、と死せりという。

何時の頃なりしが詳かならざれども大洪水の際天王の御礼流し来りて此の地に止まりにつき一小祠を建立して世増村氏神とせり、毎月旧暦十五日には精神して今尚村民宗拝せり。

此の村は本村中にても古里と共に昔よりの部落にて何れにも地頭あり。往昔繁昌せるも如何せん世の進歩に伴ひ交通の不便を感じ地伝せるもの数多くありし為めか現今は一小部落すぎず地頭と名づかる旧家より考うるれば或は鎌倉時代より移住せるものなるか口碑のまま。

(ロ) 門前と称する所に舘あり一は本丸にして一は外舘なり昔し、如何なる人の築きしものか今尚堀の跡存して当時の面影を偲ばしむ。言い伝には四戸太郎左エ門とか言ひる人茲に居れりという島守舘とは茲をいうなり。此の地山川の眺め宜しき一小丘古へと舘としては天与の地なり。

(ハ) 頃巻沢には八幡宮の鎮座あり伝へ言う昔し此の地に一小丘の舘あり。現今其の跡の幾部残れり、名づけて家号を堀という。往昔島守舘より時々矢を射られたり。当時鎮座せる八幡宮の御遺光あり。敵の放でる矢悉く方向を失へて坂に立ちたり名づけて立坂と称す。又往時坪の内と唱へし（現今字八ッ森）処は当時舘に居りし人の庭園なりと伝う。其頃弥左エ門と嘉左エ門という名風の者あり常に乗馬にて境界を巡視せる由、現今岩織吉太郎氏宅に当時使用の乗鞍ありとこなれど　見附からず。

(二) 村社高山神社々地東西六間半南北十七間半（面積百十三坪一合）字高山の北丘皐上二三間四面の祠堂あり祭神大山祇命外高山社神、神明社、春日神社、天幡宮、宇気母知神、金勢神社の六神合祀せらる（勧請年月日不詳）祭日は年三

回なり。

(ホ) 瑞雲山高松寺昔は小松寺という東西五十七間南北三十五間（面積千三百七十六坪四合）門前の地に在り臨済宗山城国妙心寺の末派に属す享保十八年癸丑創建僧廣照を開山とす。

(ヘ) 嶋森虚空蔵御本尊来る廿三日島森へ、遣候付高松寺へ御目付方より状遣高松寺住寺廿三日登城　仕様にと申遣候とあり（貞享四巳 御日記）

島森高松寺へ虚空蔵一躰は（黄金立像にて高さ一寸八分）南部家二代の大守道政公御代貞享四年巳十二月二十三日高松寺当主を攻ばせられ御預けとなり、此時御初尾金百疋下さる。皈寺のせつ伝馬御証文下さる。其の後元録五年申の三月八日大守直政公今渕茂右エ門を奉行に命ぜられ大工頭其惣右エ門、助左エ門、長兵エ等を相添えられ島守へ遣はされ虚空蔵堂の建立を命ぜらる四月二十八日に遷宮なり（之は旧記録より）

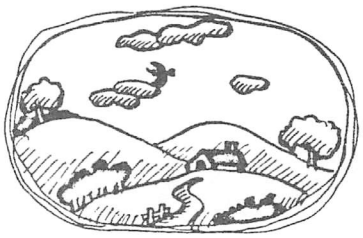
虚空蔵山一名浅田山と称す本村の西北字門前の西南に聳え鷹巣川に瀬し岩石壁立して水潯に臨み、山影倒れて空潭の底に落ち、三面は悉く其の龍頭に接す。古堂あり嶺上に存す。曽て　虚空蔵を安置し、毎蔵旧四月十三日之が例祭たるを以って遠近より男女幼老の別なく皆此地に蟻集せり。然るに登路危絶殆ど屏立するを以って鉄鎖を下げ詣人をして之に掴らしむ。嶮岨の状亦想べし。明治革新之を段棄せしより現今に至りては龍興山神社と祭り、虚空蔵一躰は山麓の小堂に安置せらる。

(ト) 龍興山虚空蔵菩薩の鐘は龍興山下、福一満虚空蔵菩薩堂の境内にあり、干時天保四年千巳八月吉日竣工重さ六十〆目なり。

(チ) 八幡大菩薩の鐘は昔八幡という所にありしが溌社となり現今は往時の境内僅かに一部を残し居れど悉く畠となり居れり明治三年に至り鐘を瑞雲山高松寺境内に移せり銘曰

無　邊　功　徳	本　自　眞　誠
萬　鉤　宝　器	百　石　感　声
震　動　世　界	利　器　衆　生
国　々　殷　々	涼　々　清　々

耳　根　正　浄　　意　識　洪　明
消　滅　業　障　　永　致　祥　襖
高松現住静翁謹記正与
干時嘉永七年（甲寅）九月十五日
奥州八戸鋳工　　植邑玄兵衛護宰　作



(り)　八戸藩主南部直政公より御寄進の半鐘高松寺内にありしが今現江花沢に移されたり。

(ヌ)　月峯山廣沢寺は曹洞宗にして現今八戸町類家にあり、往時此の寺は当村不習と称し、途中の沢にありしとの由今尚庭の跡ありとか、口碑のまま茲に記す。

(3)　管轄所属石高

本村は、旧藩主南部公の領内にして奥南温古集によれば（貞享元年陸奥国南部領郷村高辻帳）五百六十八石二斗六升七合島守村とあり。

貞享元年一１６８４年　嘉永七年一１８５４年

十干十二支の音訓と組み合わせ表

十干	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
	コウ	オツ	ヘイ	テイ	ボ	キ	コウ	シン	ジン	キ
	きのえ	きのと	ひのえ	ひのと	つちのえ	つちのと	かのえ	かのと	みずのえ	みずのと

十二支	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
	シ	チュウ	イン	ボウ	シン	シ	ゴ	ヒ	シン	ユウ	ジュウ	ガイ
	ね	うし	とら	う	たつ	み	うま	ひつじ	さる	とり	いぬ	い
十二支に動物をあてる	鼠	牛	虎	兎	竜	蛇	馬	羊	猴	鶏	犬	猪
	ねずみ	うし	とら	うさぎ	たつ	みずち	うま	ひつじ	さる	とり	いぬ	いのしし

島守のことば

(1) 島守方言の自称対称の人代名詞

自称　ワレ　ワン　ワー、オラード、オランド、

対称　オマイ、オガ、オンナ、ソンダ、テスカ、オンナド、ソンダチ

○ワンモ　イグ　ワー。

わたしも行きます。

○ワンモ　ソコサ　イッタッタ。

わたしもそこに行ったことがある。

○ダーモ　シナガラ　ワー　シベァーネ。

だれもしないからわたしがしましょう。

○オランドァ　ツカッタ　コタ　ゴアセン。

自分たちは　つかったことはありません。

(2) 島守方言の尊敬法助動詞

ナサイ、ナサー、ンサイ、サイ、サー、ナ

オ……アル、　オ……ヤレ、　オ……アンス、　オ……ヤンス、

オ……アス

○カケナサー。イップク　ヤリナサー。

掛けなさい。一服やりなさい。

○オアゲアーテ　クンサイ

召し上がって下さい。

○アガッテ　クンサイ

召し上がって下さい。

○ハヤク　コッチサ　キサイ。

早く　　来なさい。

○マンマ　カサイ。

ごはん　たべなさい。

○ハーラ　サーイ。

はいりなさい。

○ヤスマサー。

休みなさい。

○カケサー。

掛けなさい。

○カサー。
たべなさい。
○ネマラサーエー。
すわりなさいよ。
○トーチャン、イットキマ　キテンナ。
父ちゃん、ちょっと来てみな。
○オダシアッテ　クンサイ。
お出しになって下さい。
○オデアーテ　ケサイ　エー。
おいでになって下さいね。
○オヨミアテ　ケサイ　エー。
お読みになって下さいね。
○コッチャ　オンデヤレ。
こっちへ　おいでなさい。
○コッチサ　オデァンセ。
こっちへ　おいでなさい。
○ソノ　ママデ　オデヤンセ。
そのままで　おいでなさい。
○オデァセ。
おいでなさい。
○ワカリ　ヤンス　カ。
わかりますか。
○イッテ　ミヤンス　カイ。
行ってみますか。（隣家へ）
○クンサリ　アンセ。
下さいませ。
○ソーデ、アリャンス。
そうであります。

(3)　島守方言の文末詞

ナ、ナー、ナシ、ナムシ、シ、ヤ、ヤー、エ、テー、ヨ、カ、カイ、ド、サ、サー、ダ、ダー、デァ、デァー、モン、オン、ワイ、ア、アー、アーイ。

○ユッコ、タデナカッタ　ナ。
おふろを　たてなかったかね。
○ソーンダ　ナー。
そうだねえ。
○ソーンダ　ナスー。
ほんとうにねえ。
○ソーンダ　ナムシ。
そうで　ございますねえ。
○イグ　ベー　ス。
行くことにしましょう。
○ゴタゲ　ヤ。
ご大儀さま。
○モーシワゲ　ネードモ　ヤ。
申しわけないけどね。
○アラ　ヤー。
おや　まあ。
○オドンベ　ヤー。
おどりましょうよ。
○ナガベガ　ヤー。
ないだろうかなあ。
○クヤシクテ　ダベヤ。
悲しくていらっしゃいましょう。
○シャベッテ　ヤッタイ　ヤー。
しゃべってやったよ。
○アルッズァ　エー。
あるそうですよ。
○クヤシクテ　ダベ　ヤ　エ　ー。
悲しくていらっしゃいましょうねえ。
○オセーデ　ケサー　エー。
教えて　下さいねえ。
○アイダッコワ　ヨ。
間はよ。（説明）

○ソコニ　イダヨ。

そこにあるよ。

○イツヨ。

いつかね。

○ナンボーカラダイ。

いくつからだい。

○ソーダ　カー。

そうか。

○マーダ　カイ。

まだかい？

○どこそこのママは、アルカイ。

どこそこのおじいさんはまだ生きているかい。

○ドコサ　イグ　ドー。

どこに行きますか。

○ハナシサー。ソレモ。

話さ。それも。

○マーダ　サー。

まだ　　さ。

○ア、ソー　サ。

あ、そうさ。

○アノ　ナ　サ。

あの　ね。

○ソーサ　ナシ。

そうですねえ。

○オラ　ナーンモ　ワカラナーダ。

わしは何もわからないよ。

○ナーデモ　ヨ　ダー。

なんでも　よいよ。

○ソコラヘンノ　タナ　ミロデァ。

そこらへんの棚を見ろよ。

○ミンナセ　ヨレデァー。

みんな　寄れよ。

○ネボケンナ　デァ。
ねぼけるなよ。
○カゲナー　デァ。
書けない。
○ツカワナインダ　オン。
つかわないんだもの。
○イットキ　ヤスムベア。
いっとき　休みましょう。
○ノルベァー。
いっしょに乗りましょう。
○アルズァー。
あるそうですよ。
○オセーデ　ケロ　アーイ。
教えて　くれよお。

文法からみた方言と共通語

藤　原　与　一　著

◎参考文献

「島守の伝説」　発行者　佐々木　金　田

「文法からみた方言と共通語」　藤　原　与　一　著